



ICT 海外ボランティア会会報

No. 33

2012年6月22日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : sv@info.nttob.org

目次

- ◆ 巻頭言
「日本発」の推進に向けてBHNの活動と貴会の発展
BHN会長、元NTT副社長
桑原 守二 氏
- ◆ 特別寄稿
合理化には別の意味もある(真藤語録からその7)
本会顧問 石井 孝 氏
- ◆ 特別寄稿
航空機運行の神経・空港関連無線電気通信サービス
日本空港無線サービス元代表取締役社長
榊原 一郎 氏
- ◆ 特別企画
国際協力に尽力された思い出
- ◆ 会員リレー寄稿(第19回)
サプライズでブルガリア再訪
元青年海外協力隊、本会会員
河原美和子 氏
- ◆ BHNテレコムからお知らせ

巻頭言

「日本発」の推進に向けてBHNの活動と貴会の発展

BHNテレコム支援会議会長 元NTT副社長
本会サポーター 桑原守二

ICT 海外ボランティア会会報に巻頭言を述べる機会を与えていただき、まことに光栄に存じます。

本会の前身である NTTOB シニア海外ボランティア会は、2008 年 8 月 21 日、北京オリンピックにおいて日本女子ソフトボールチームが金メダルを獲得した良き日に発足したと伺いました。発足にあたっては、現在も顧問をされている石井孝さん、事務局長をされている



加藤隆さんのお二人が多大なご努力をされたことを私も承知しております。私はお二方に 50 年以上に亘りご厚誼を頂いております。会の現在のご隆盛に対し心よりお慶びを申し上げる次第です。

NTTOB シニア海外ボランティア会は、2 周年となる 2010 年 8 月、さらに大きく発展させることを期して ICT 海外ボランティア会と名称を変更されました。これには大きく二つの意味が込められていると感じます。

第一は、会員の構成はもちろん、会が支援する対象を NTTOB に限らず、広く ICT に関連する方々に拡大したことです。NTT 以外の企業の OB でもシニアボランティアに参加されておられる方がたくさん居られます。当会がこうした方々に対して幅広く支援活動をされることは、まことに有意義なことだと思います。

第二は、シニアボランティアに限らず青年海外協力隊(JOCV)の現役および OB にまで範囲を広げられたことです。これらの方々の中から、いずれシニアボランティアに応募される方がたくさん出られることでしょう。また、本会の会員に NTT や ICT 関連企業の現役が含まれていることにも驚きを禁じ得ませんでした。

ところで、私が会長を務めさせて頂いている BHN テレコム支援協議会は今年で 20 周年になります。チェルノブイリ原発事故被災者のデータを送るマイクロ波回線の建設から始まり、その後、ラオス、アフガニスタンなどの僻地医療機関への無線網の建設、遠隔医療診断などの人道支援活動、地震・津波・サイクロン等大規模災害発生時や紛争による難民救済などの緊急支援活動を行って参りました。また、1998 年からはアジア各国の情報通信関係者の人材研修プログラムを開始し、これまでに 13 か国、100 名を超える研修生を送り出しております。

このように、昨年までは発展地上国を対象とする海外への支援活動が主体でありましたが、昨年 3 月 11 日の東日本大震災に際してはその悲惨な状況を看過できず、活動を海外支援のみに限定しないこととし、その後は大震災被災地に向けての支援活動も続けております。すなわち、岩手県釜石市等沿岸被災地 4 市 2 町の避難所等に対するインターネット設備の構築およびラジオ・スピーカー等の配布、福島原発事故により計画的避難を余儀なくされた飯館村役場と村民の避難先を結ぶ情報通信システムの提供、東北 3 県の臨時災害放送局の建設、宮城県石巻市および周辺市町被災者のための IT 活用による生活支援などです。今後、国による被災地復興支援が本格化するに従って、BHN の活動は再び海外が主力になると考えております。

BHN の会長として、私は 3 代目となります。初代は浅原巖人さん(故人)、2 代目は信澤健夫さん(現名誉顧問)です。お二人とも崇高な信念をもって発展途上国に対する支援活動を行ってこられ、私はその姿に深い尊敬の念を覚えずには居られませんでした。

浅原さんはクリスチャンのご家族に生まれ、お育ちになって、「愛」、「奉仕」等ということに感受性の高い方でした。ITUから1984年に出されたミッシングリンクというレポートが「21世紀初頭には世界中のすべての村落で電話が使えるようにしよう」という呼び掛けに強く同調され、テレコムに特化したNGOの設立に尽力されたといえます。

また信澤さんは常々「恩返しの気持ちが我々の活動の原点である」と言われていました。「日本が戦後の廃墟の中から立ち上がり、平和を維持し、経済的にも繁栄を謳歌してられるのは世界の多くの国々や人々の支援のおかげである。我々はその御恩を今、世界の貧しい国にむかってお返しするのだ」という強い思いがありました。

お二人と比較して、私の支援活動の根底には、かなり打算的なものがあるように反省しております。

私には発展途上国において日本のプレゼンスを少しでも高めたいという気持ちがあります。この10数年、NTTをはじめICT関連メーカー、工事会社、商事会社などが国内に閉じこもりがちとなり、海外における往年の活躍ぶりが消えてしまいました。私はそれが残念でならず、僅かな仕事であっても「日本発」という名前を残したいという思いがあるのです。

ICT海外ボランティア会に所属し、あるいは会の運営を応援されている方々はもっと純粋に、派遣された発展途上国のお役に立ちたいと思いつつ行動し、現に行動されていることと信じております。日本人の中で、そのような気持で居られる皆様は私たちの誇りであります。

懸念していることが一点あります。NTTからの青年海外協力隊員の数が減少していることです。私が関東総支社長をしていた昭和61年～63年には毎年30名以上の社員が協力隊員として派遣されておりました。特に関東と九州からの応募者が多かったと記憶しております。それが最近では5名程度に過ぎないと伺いました。若い社員の方々がもっと積極的に応募していただききたいし、NTTおよびNTTグループ会社側もそのように社員を勇気付けて頂きたいと念じております。

明治時代の日本人は、勇気とともに謙譲の美德を持ち、礼儀の正しさで日本を訪れた外国人を魅了いたしました。戦後の日本人はその多くを失ったと言われますが、外国に住んでみると、日本は依然として素晴らしい国であることが良く分かります。海外でボランティア活動をされた皆様は、そのような日本人の長所を十分に発揮し、派遣国の人々が日本に対して好感を持って下さることに大いに貢献されたことと思います。皆様方が今後もぜひご健康で活躍されることを祈りつつ、巻頭言とさせていただきます。

特別寄稿

合理化には別の意味もある（真藤語録から その7）

本会顧問 石井 孝

【元NTT社長 真藤 恒氏の語録】

合理化というと、人員整理と多くの人は考えているようだ。首切りとはいえないから合理化という。だが合理化には別の意味もある。

合理化についての古典的な考え方は、組織のむだを削ることであろう。そうではなくて、

仕事のやり方を変えることによって、いままでのむだが自然に落ちるようにするのが新しい合理化だ。

仕事のやり方というものは時代とともに変わらねばならない。世の中の変化を取り入れながら組織を変えるわけである。そうすると、それに見合う人員配置が必要になってくる。私の企業でいえば、新規事業に進出することによって、電話についている人員を減らし、これを新規事業に吸収する。

合理化は組織の人間の知恵と、その知恵を実現させる金と、世の中のために働こうとする人びとの意欲が一つになった時うまくいく。

【石井 孝氏の一言】

交換機のソフト内製も何とか軌道に乗り、半年毎に新しいバージョンのプログラムファイルを定期的に出荷できるところまでになった。しかし、バグが皆無のソフトウェアなどあるはずもなく、出荷した後は、何時トラブルが起きシステムダウンを起こさないか、心配の毎日であった。

そこで、金がかかるが、全国に散在する交換機をソフト開発担当者が直に遠隔で集中的に監視できるシステムを構築し、24時間・365日体制でモニターして、何か異変をキャッチしたら即座に遠隔修理できるようにした。これで枕を高くして眠れるようになった。

こういったシステムができると、今まで交換機が設置されている電話局で日夜保守を担当してきた職員は不用になる。

昨今、コンピューターの遠隔運転は当たり前、クラウド全盛期であるが、1989年当時としては全く新しい試みであった。内製部隊ができ余計なことをするから職場がなくなる。労働組合も黙っているわけにはいかない、色々なことがあったが先見の明のある労組幹部の理解もあり仕組みは定着できた。

今となってみれば三万人ぐらいの現場保守職員の職転などで、新規採用なしで新規事業に挑むなどして、昨今の電話収入の落ち込みをカバーして余りある効果を果たしたのである。

また、ここで得た教訓は、何かを成し遂げようと懸命になると、思わぬ副産物が得られるということであった。トヨタがカンバン方式を発明したのも、生産性をとことん追及した結果の副産物ではなかったかと納得した。

仕組みが出来あがった段階で真藤さんに報告すると、にこりともせず、真顔になり、しみりと、漸くお前も仕事の意味がわかったか、という趣旨のことを言われた。

特別寄稿

航空機運行の神経・空港関連無線電気通信サービス

日本空港無線サービス元代表取締役社長
本会サポーター 榊原 一郎



携帯無線機

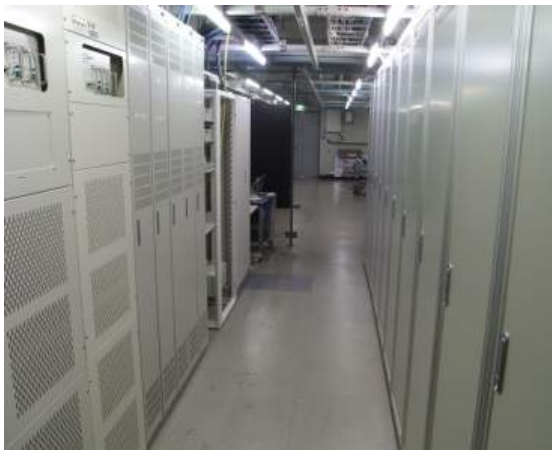
私は 2005 年から 2011 年までの 6 年間この会社の社長に在任しましたので事業の紹介をさせていただきます。

日本空港無線サービスは昭和 52 年、成田空港開港に先立ち、空港におけるいくつかの通信サービスを提供するために成田空港内に設立されました。当時電気通信サービスは電電公社と KDD しか提供することが出来なかったため、空港に常駐し実務を行う会社を二社の子会社として成田空港内に設立し、サービス提供の実務と保守運用をおこなうこととしました。両社が関連したのは、空港内の地上通信や国内航空会社の航空機と地上が行う通信は「国内通信」、海外の航空会社の航空機が地上と行う通信は「国際通信」と規定されるからです。

2000 年からはサービス提供も弊社に移行して、独立した電気通信事業者となり、同時に資本も NTT 東日本 100% となり完全子会社として約 20 名で事業を行っています。

元来、航空機の運航には数多くの無線通信システムが使用されています。航空機の運航をコントロールする航空管制無線、航空機の航路をナビゲートする VOR・DME といった無線標識、着陸時に使用する計器着陸装置 (ILS)、航空機の識別情報、搭載燃料、気象情報、フライトプランデータなどをデジタル化して送るデータリンク・システム、そしてこれらの情報のやりとりを音声通信で行う A/G (Air to Ground) 通信などがあります。また地上業務のために、空港での各種業務の連絡用として、トランシーバや MCA システムを使った業務用通信があります。

これらのうち日本空港無線サービスは A/G 通信と、空港での MCA 音声電話サービスを提供しています。



MCA システム基地局



MCA アンテナ (左端)

空港 MCA は空港内の旅客、貨物、整備、給油、ケータリング、警備などの多くの業務の音声連絡に使用されています。複数の人が同時に同じ指示や応答を聞いて業務を行う、グループ通話が基本です。

ユーザーの業務構成に従って、数台から数十台を 1 グループとして設定し、同時通信をしています。業務用の通話は非常に短く、指示、応答、再指示などの一連の通話が平均 20 秒で終了します。

このため無線が聞こえない場所 (不感地) があると、通話が短いだけに内容がわからず業

務に支障が出るため、不感地を極力無くす必要があります。このための設備構築がこのサービスの鍵になり、空港ビルや駐機場を複数人でくまなく歩いて了解度を測定し、必要な設備を作りました。

グループ通信はシステム設計上独特の特性があり注意を要します。携帯電話はエリアを分割する事により収容端末数を増加する事ができます。しかしグループ通信はグループに属する複数の端末が異なる複数の基地局エリアにいと、それぞれの基地局で同時にチャンネルを占有します。システムの最大チャンネル数には限界がありますので、基地局を増加するほど、最大通信チャンネル数が減少し、システム容量が小さくなります。このような特性を充分熟知して空港 MCA のシステム設計をする必要があります。

空港は多くの機能が有機的に動いて初めて航空機の定時運行が可能になります。このため業務連絡用の MCA システムは空港の神経系統ともいえ、高品質で安定な通信が要求されます。このサービスは成田空港と那覇空港の 2 ヶ所で提供しています。

A/G システムは航空機が空港に着陸する前に航空機から自社の地上運行管理担当との間で情報交換するための通信で、到着するスポット、空港の天候、車椅子の必要性などの情報がやりとりされます。このサービスは札幌、成田、羽田、中部、関空、福岡、那覇の 7 空港で提供しています。

空港無線は空港に限られた小さな市場で事業をしています。MCA は他社が羽田、中部、関空でサービスをしています。全社の端末を合わせても 1 万台弱、成田と那覇で 4200 台ほどの規模です。10 年ほど前はこの小さな規模の市場に競争事業者が入り、健全な経営が危ぶまれた事もありました。弊社は敢えて品質を重視した多くの投資を行い、無線のエリアカバーで圧倒的な優位に立ちサービスを提供しました。その結果、新規参入者に移行したユーザーも徐々に戻ってきて、投資の回収・収益の改善が可能となり、現在は安定した経営が出来るようになりました。

現在の MCA システムは 2005 年にサービス開始しましたので、まもなく次期の方式を検討して投資時期を決定することが必要となります。常に安定した高品質な通信を提供するために、空港の通信インフラ事業者として最適な設備を構築すべく、中長期を見つめた経営を行っています。

特別企画

国際協力に尽力された思い出

— 柴田俊造様 から 北川泰弘様 への手紙 —

本会の前会報 (32 号) において、図書発刊のお知らせとして、「一つの国際協力物語・タイのモンクット王工科大学」が出版されたことのお知らせしましたところ、本会会員北川泰弘様がそれを購読され、また柴田俊造様へ送られました。本文は柴田様から北川様へ送られた手紙「謝辞並びに国際協力に尽力された柴田様の当時の回顧」をお二人の了解を得て掲載するものです。(編集担当)

北川泰弘様

この度、タイのモンクット王工科大学設立についての荒木光弥著『一つの国際協力物語』をお送り頂き有難うございました。熟読させて頂き、二人のキーパーソン梶井剛・松前重義両氏の時代を超えた偉大な見識と実行力が素晴らしい国際協力を成し遂げ、モンクット王工科大学と言う宝を産み出した事に、改めてお二方に対して尊敬の念を新たにしました。

モンクット王工科大学から東海大学に留学してきた学生たちに私は日本語を教えたのですが、その事についても記述されており、教え子たちの現在の写真も掲載されていたので彼らの当時は思い出し、懐かしさのあまり涙が零れてしまいました。1977年から来日した学生たちは、他の留学生の模範的存在で極めて優秀でした。中でもジョンコンさんは小田急線で何時も一緒になるのですが、声を掛けるのが悪いと思うほど、専門書を懸命に読んでいたのが未だに目に焼き付いております。彼女は現在、唯一手紙のやり取りをしている人物です。かねがね思っていた事ですが、今回送っていただいた本に触発され、今年はずひタイを訪れ、教え子たちに会いたいと思っております。タイには東海大学時代以前の国際学友会日本語学校で教えたタイからの留学生も大勢いたので行けば会えるだろうと楽しみにしております。

「海外からの第一号のダナイさん」が取り上げられていましたが、私が国際学友会日本語学校に就職した昭和34年(1959年)には彼は既に東海大学の学部学生になっており、国際学友会の留学生会館のテニスコートで華麗なプレーをしていたのが印象に残っております。当時は、多くの国々から留学生が来ており、中でもタイからの留学生が多く、珍しいのは、タイ警察官が日本の警察学校に入学するために日本語を学んでおりました。彼らは1年間日本語を学び、警察学校の入学試験に合格し、1年間、日本人と一緒に警察学を学んだ後、交番で実習するのですが、東中野駅の傍の交番に立っていて、私が通る度に警察官として素晴らしい敬礼をしてくれました。

財団法人国際学友会が外務省の外郭団体という事もあって、日本語教員は当時OTCA(海外技術協力事業団、JICAの前身)から日本語教育専門家として海外に派遣される事が多く、私は1962年から4年間カンボジアのプノンペンのリセ(高等学校)とコレージュ(中学校)の2校に派遣され、カンボジアの将来を担う若者たちに日本語を教えました。教室には裸電球が一つ灯っているだけと言う粗末な教室でしたが学生たちの瞳は輝いており、カンボジアの将来を担うのは俺たちだと言う気概を感じたものでした。その間、北川さんと親しくお付き合いをさせて頂き、北川さんのお世話でPTT(郵便・電気通信省)の若手幹部に日本語を教えると言う貴重な経験をさせて頂きました。ポルポト時代に多くの教え子たちが殺されたと言うことを知り、何時の日か、家内共々カンボジアに鎮魂の旅をし、亡き教え子たちに線香を手向けて来ようと話しております。

その後、インドネシアのジャカルタにある国立インドネシア大学に外務省から派遣されて3年間日本語を教えてきました。40数年経った現在でも当時の学生(当時は20歳前後の乙女たちでしたが、昨年、学生の一人から息子が結婚するので結婚式に出席してくれと招待され訪問したのですが彼女たちは60歳台の熟女になっていました)とは未だにメールの交換をしています。

私はインドネシアからの帰国後、国際学友会から東海大学の留学生教育センターに移り、留学生教育に従事しましたが、その間、松前重義総長から国際交流についての薫陶を得、その精神を徹底的に教えて頂いた事は私の人生に宝物を頂いた事と心から感謝致しております。国際学友会で14年間、東海大学で17年間、九州大学で6年間、一貫して日本語教育に従事してきましたが、それぞれの場所で貴重な勉強をさせて頂きました。中でも東海大学での17年間は私の一番充実した期間でした。世界が資本主義と共産主義とに二分され、日本政府がアメリカ側の一員として共産圏にはそっぽを向いていた時でも、松前重義総長は決然とモスクワ大学、東ドイツのフンボルト大学、ブルガリアのソフィア大学、ハンガリーの高等教育省と学術交流協定を結び、その結果、共産圏諸国から大勢の学生が東海大学に留学し、留学生教育センターはそのために特別クラスを設け、日本語教育と同時に日本のあらゆる分野についての講義を行いました。その波及効果は計り知れないものがあったと思っています。

第二次世界大戦中に、日本にアメリカと五角に戦う能力なしとした松前氏の考え方が東条英機首相の逆鱗に触れ、通信省工務局長という要職にあったにも関わらず、二等兵と言う懲罰召集令状を受けて戦地に行かされ、九死に一生を得て帰国したという反骨精神が、戦後においても滔々と総長の精神の底辺に流れており、それが東海大学の建学の精神となって現れているのだと思います。私は当時の共産圏の国々に松前重義総長の意により教えに行く事ができ、普通では味わえない素晴らしい経験をさせて頂きました。

語ればキリがありませんので、来年も今年と同様に長崎の（旧制）中学校の同窓会の帰りに福岡にお寄り頂いて、また玄界灘で獲れた活きの良い魚で杯を傾けながら国際協力・国際交流のお話等を伺いたくお待ちしております。

2012年6月11日

柴田俊造 拝

柴田俊造氏 略歴

1932年（昭和7年）生、山口大学文学部卒業、九州大学大学院文学研究科を経て、財団法人国際学友会日本語学校副校長、東海大学教授・留学生教育センター所長、九州大学教授・留学生センター長を歴任。長期、短期を含めて海外での日本語教育は、カンボジア、インドネシア、中国、ソ連、東ドイツ、タイ、インド、スリランカなどで行った。

会員リレー寄稿 第19回

サプライズでブルガリア再訪

元青年海外協力隊 本会会員
河原美和子

2006年12月から2008年12月まで、JICAの青年海外協力隊事業に参加し、コンピュータ技術隊員としてブルガリアで活動しました。配属先は、ソフィアの南東150kmに位置しているブルガリア第2の都市プロヴディフの市立歴史博物館でした。派遣先からの要請は、

「収蔵品データベースの開発」。他にも、「日本文化紹介」や、JICA ボランティアプロジェクトである「博物館ポータルサイトの現地移譲」など、職種や要請とは別の活動も行いました。ブルガリアは、2007年1月にEUに加盟したため、配属先にとって自身が最後のボランティアという位置づけでした。

2011年5月、2年半ぶりにブルガリアを訪問しました。首都ソフィア、バラの谷カザンラク、僧院で有名なリラ、黒海沿岸の世界遺産ネセバル、岩の要塞で知られる隠れた名所ペログラチック、そして任地のプロヴディフです。会社の同僚とともに、約10日間で各地を回りました。2月頃から計画していましたが、プロヴディフの元同僚たちには秘密。サプライズで訪問しようと考えていたからです。

ブルガリアは、変わらず人も街も本当にのどか。人々はどこか開き直ったところがありますし、ソフィアですら未だに歩道はガタガタ、鉄道車両はボロボロ。特急電車でも各駅停車程度の速度で走ります。EU加盟国であることが信じられないくらいです。「ブルガリアは数十年前の日本に似ている」とおっしゃっていたSVの方がいましたが、おそらくその通りなのだと思います。どこか、レトロで懐かしい雰囲気が残っています。

今回の旅行で特に印象に残ったことは、予想以上に現地の人が東日本大震災に関心を持っていたこと。ペログラチックでは、階段ですれ違う現地旅行客に「神のご加護がありますように」と額に接吻の洗礼を受け、鉄道やタクシーの運転手にも震災後の様子について聞かれましたし、元任地である博物館の館長とは、1時間ほど震災の状況について話をしました。赴任当時は必ず中国人と間違えられていたにも関わらず、連日の震災関連ニュースで日本人を見慣れたせいも、今回の訪問では一切間違えられることもなく、ほとんどのブルガリア人が自分たちを日本人として接していたことも驚きの1つでした。

現地の元同僚たちへのサプライズは大成功でした。Facebookを通じて、無事であることは伝えていたものの、まさか1ヶ月半後に現れるとは思わなかったのでしょうか。カウンターパートは、驚きすぎて私を見るなり驚嘆が悲鳴に変わっていました。

ブルガリア人らしいのは、何か珍しいことがあると昼間からパーティが始まること。今回の訪問もお祝いの例外ではありませんでした。(写真)



普段から、誕生日はもちろんのこと、名前の日※、孫が生まれた、車を買った、家を買ったなどなど、とにかく祝い事があるとお祝いしたい人がみんなに振る舞います。赴任当事も現地に少しずつ馴染んでいけたのは、振舞われたり振舞ったりとコミュニケーションのきっかけとなるこの習慣の存在が大きかったように思います。今回も元同僚たちがそろそろ棚の奥からラキア※2 やら赤ワインやらを取り出し始め、私たちのグラスになみなみ注ぎます。「自分たちは仕事があるから」と、グラス半分くらい。一応の遠慮はあるものの結局飲んでしまう。つくづくブルガリア人らしいと思う瞬間でした。

パーティの中でも、やはり震災の話題になりました。さらに関心が高いのは福島原発事

故でした。チェルノブイリを経験しているブルガリア人としてもひと事ではないそうで、当
事の状況を今でも覚えていました。チェルノブイリから 3000km 離れたブルガリアも汚染範
囲に含まれており、正確な数値は不明ですが亡くなっている方もいるそうです。被爆して亡
くなっている方はお気の毒に思いますが、私はこの話を妙に勇気付けられるような思いで聞
いていました。なぜなら、目の前のブルガリア人たちは、チェルノブイリの 20 数年後も元
気に生きているわけですから。農業国であるブルガリアの大地で育った野菜を食べていま
し、牛乳やヨーグルトを飲んで生活してきています。彼らとの対話を通じて、どこか気持ち
が明るくなったように思います。

震災から 1 年後の 2012 年 3 月。元任地の博物館で在ブルガリア日本大使館主催の東日本
大震災復興写真展「明日への希望」が開催されました。Facebook にオープニングセレモニー
の様子が掲載されており、ありがたい思いで見えていました。ブルガリアの EU 加盟を受けて
JICA によるボランティア派遣は終了しましたが、今後も日本とブルガリアのつながりが続
いていくことを願います。

※1 ブルガリア正教にちなんだ風習。1/X はゲオルギさんの日、4/X はマルガリータさんの日など、
毎年、異なる日にちが定められている。

※2 ブルガリア特有のぶどうの蒸留酒。市販のものは 40 度、ホームメイドは 45~60 度になるもの
もある。

河原美和子さんの青年海外協力隊活動報告は、電気通信協会発行「電気通信」誌（2012
年 2 月号）に掲載されております。併せてご覧ください。（編集担当）

BHNテレコムからのお知らせ

BHN テレコム支援協議会入会のお願い

当協議会の設立趣旨、活動につきましては、本会報巻頭言で当協議会桑原会長より
紹介があります。また当会ホームページ (<http://www.bhn.or.jp>) でご覧頂きたく存じ
ます。支援のお気持ちをお持ち頂いた方々の会員としての参加をよろしくお願い申し
上げます。

会員の方には会報誌「TELECOM CROSSROAD」（季刊）をお送りして活動状況
を定期的にお知らせするほか、正会員の方は年に一度開催いたします総会のご案内を
させていただきます。

入会は、当協議会のホームページからお申込みいただけます。

個人会員の資格および年会費は以下の通りです。

個人正会員会費 : 1 口 3,000 円（議決権あり）

個人賛助会員会費 : 3,000 円以上（議決権なし・賛助会費は、寄附金扱い）

詳しくは、事務局までお問い合わせください。

担当：福島文枝 E-Mail : bhntelecominfo@bhn.or.jp

TEL : 03 - 6803-2110 FAX : 03 - 6803-2134

メールマガジン配信登録」のおすすめ

本会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤 睦氏からのおすすめです。
SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。
きっと皆様のお役に立つと思われます。(編集担当)

手順は次の通りです。

- ① Internet Explore で「JICA」を検索
 - ② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
 - ③ 右手の JICA ボランティアをクリック
 - ④ 情報満載メールマガジンをクリック
 - ⑤ メールマガジン配信登録をクリック
 - ⑥ 所定の個人情報を記入
- (<http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail>)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 巻頭言は、BHNテレコム協議会桑原会長よりいただきました。協議会の活動がますます拡がりを見せ、深くなっておりますことに敬意を表しますと共に、本会の活動とのタイアップが一層強くなることを祈っております。桑原様は本会サポーターの第1号であり、日頃ご支援をいただいております。「テレコム支援協議会入会のご願い」も掲載させていただきました。
- ・ 本会石井顧問からは、元NTT真藤社長の語録(7回目)をいただきました。石井様には今まで長期に亘り、毎回10ページを超える、週間「IT関連ニュース」をいただき、会員の皆様にインターネットで配信させていただきました。大変好評でしたが、この度ご都合で中止となりましたが、この機会に長年のご尽力に対し感謝申し上げます。
また本会サポーターの榊原さんから、普段なかなか知り得ない空港関連無線電気通信サービスについて紹介していただき、興味深いものがあります。
- ・ 特別企画として、“国際協力に尽力された柴田様の当時の回顧”の書簡を掲載させていただきました。現在タイを始め諸外国とわが国が友好関係にありますのも、柴田さんを始め、

先達の長年に亘り、忍耐強い草の根的なご努力があったからこそ、敬意を表したいと思
います。(以上 加藤)

- ・「会員リレー寄稿」に今回河原さんに寄稿頂きました。久しぶりに JOCV 経験者のフレッシュな
ブルガリア紀行文を感慨深く読みました。桑原さんご指摘との関連もありますが、今後も JOCV
経験者の多くの寄稿をお待ちしております。(村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編 集 長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発 行：ICT 海外ボランティア会 (メール：sv@info.nttob.org/)